

---

# 千歌音ちゃん、売ります！

雨鱒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

千歌音ちゃん、売ります！

### 【Nコード】

N7957Z

### 【作者名】

雨鱒

### 【あらすじ】

「千歌音ちゃん、売ります！」『コール・オブ・デューティ』に夢中になり過ぎたあまり、誰とも会話をしなくなった千歌音に切れた姫子が取った行動とは…？ 米国で実際に遭った出来事をネタにした話です。

(前書き)

凄く変な小説だね

ここ最近、姫宮千歌音は学校の行事には一切参加はせず、真っ直ぐ帰宅してしまふ事が多かった。

帰宅してもメイド達に「近々ピアノコンクールがあつて、コンクールに向けて集中したいから、よほどの用事がない限り部屋には出入りしないように」と、言い、部屋に閉じ込もっていた。

それは姫子にも言われており、今では姫子すら千歌音の部屋に出入り出来ない状況だ。

この日の夜も千歌音は夕食を済ませると、さつさと自室へ行ってしまった。

姫子は、

「千歌音ちゃん、コンクールに向けて凄く集中しているんだろうな」  
「」と思いながら、自室へ戻ろうとした時だ。  
ダダダダダッ。

千歌音の部屋から機関銃の音がし、姫子は足を止める。「千歌音ちゃん、ピアノの稽古をしているはずじゃ…」

姫子は千歌音が本当にピアノの稽古をしているか、と疑い、「入るな」と言われているが、千歌音に気付かれないようにドアを明けた。恐る恐る部屋に入った姫子は目を疑った。

そこには大人気FPSゲーム『コール・オブ・デューティ』に熱中する千歌音の姿があつた。

『コール・オブ・デューティ』に熱中する千歌音は普段とは異なり、敵兵を射殺しては高笑いをしていた。

「アーハッハッハッハッ、死ね死ね」

そう、ピアノコンクールは全くの嘘。千歌音は『コール・オブ・デューティ』に集中するために誰も部屋に入れなかったのだ。

「チッ、弾切れか…」

操作する兵士の銃から弾が切れ、リロードさせる。

それを見計らっていた敵兵が手榴弾を放ったではないか。

「ああー！」

爆音と共に兵士は死に画面に“GAME OVER”と表示された。  
「クッソー！」

千歌音はコントローラーを叩き付けた。

「あ…？」

千歌音は姫子の存在に気付いた。

「ひ、姫子…？」

「千歌音ちゃん、ピアノコンクールの稽古というのは嘘だったんだね…」

「まあ、ばれてしまつては仕方がないわね…。そう、私はこの『コール・オブ・デューティ』に病み付きなっちゃってね…。誰にも邪魔されずにプレイしたいのよ…」

もはや千歌音は『コール・オブ・デューティ』の虜となっていた。  
姫子やメイド達との会話もより減り、その一方でゲームをする時間が長くなっていた。

一緒にプレイすればいい話なのだが、ゲームをやっている時の千歌音は非常に恐く、下手に話しかけて“GAME OVER”になれば怒られる始末であった。

ゲームに集中するばかりに周りが見えなくなった千歌音は些細なことから姫子にこう言ったのだ。

「姫子、いい。よほどのことでない限り私に話しかけないでちょうだい。私はこれに集中したいの！」

自分よりゲームを取った千歌音に姫子は悲しみを覚えたのではなく怒りが頂点に達した。

こんなゲーム馬鹿な千歌音ちゃんは、もういない！

その日の夜も千歌音は夕飯と入浴を済ませると、さっさと自室へ戻り『コール・オブ・デューティ』をプレイするのであった。

もはや姫子やメイド達の会話数は0に等しく、そんな千歌音に姫子だけではなく、メイド達も嫌気を示し始めていた。

が、千歌音はこの屋敷では絶対的存在であり、強く抗議したりすれば後々厄介なことになる。

普段は温厚でメイド達からも慕われている千歌音であるが、怒らせたりすれば話は別だ。

「……」

メイド長の乙羽はこの現状にふう〜と疲れた様にため息を吐いた。

「乙羽さん」

姫子は乙羽に話しかける。

「来栖川様……」

「お話があるんですが……」

「私に、ですか……?」

姫子は首を縦に振る。

「私、千歌音ちゃんを売ります!」

誰よりも千歌音と親しい仲である、姫子の爆弾発言であり、姫子の爆弾発言に乙羽は「え?」という表情を浮かべた。

「私、もうあんな千歌音ちゃんにはうんざりです。売らしてください!」

もはや姫子の千歌音への親友感というのは薄れていた。

確かに好きなものかということとは決して悪いことではないが、千歌音のゲームのハマり方は異常だ。今の千歌音に姫子の怒りは爆発したのだ。

姫子の言葉に乙羽はクスツと微笑み、高く笑った。

「乙羽さん……?」

乙羽は姫子に一步、歩み寄り肩にポンと手を乗せる。

「それはいい考えですわ。私や他の者達も今のお嬢様には嫌気が差しておりまして。今のお嬢様は売るなり好きなしてくださいな」

乙羽の意外な言葉であった。初めはこんなことを言えば怒りを買うか、と思ったが乙羽は姫子の言葉に大賛成であった。

「普段なら、怒りますけど、今のお嬢様はそう言われても仕方がありませんわ。あんなゲームばかりやっているお嬢様には私もうんざりしています！」

乙羽も姫子と同じくゲームに依存し過ぎている千歌音に鬱憤がたまっており、姫子の爆弾発言を機にたまりにたまった鬱憤を爆発させたのだ。

自分をあまり好ましく思っていたいなかった乙羽と姫子が初めて意見が一致した瞬間であった。

この日も千歌音は直ぐ様下校し、帰宅する否や自室にこもり『コール・オブ・デューティ』をプレイしていた。

今日は調子がいいのか楽々ステージを進められていた。ステージをクリアし、仰向けになり一息を吐いた。

コンコンッ。

誰かがドアをノックし、ゲームをスムーズにクリア出来て上機嫌な千歌音は「どなた？」と答える。

「私、姫子よ」

声の持ち主は姫子であった。

「どうしたの？」

「千歌音ちゃんにお話があるの」

「私に……。いいわよ」

ガチャリとドアが開き、姫子が室内に入る。千歌音は体を起こす。

「姫子、お話つてなあに？」

千歌音は首を軽く傾けニコリと微笑む。

「千歌音ちゃん、売るから！」

「え？」

「千歌音ちゃん、をだよ！」

姫子の思いにもよらない言葉に千歌音は困惑する。

「ひ、姫子。私を売ってどういうこと？ 私は何も貴女に恨みを買われるようなことはしていないじゃない……」

千歌音自身はただ単純にゲームを楽しんでいるだけで、姫子には何の迷惑をかけている訳ではない、と思っていた。

「恨みとかの問題じゃない。一日中ずっとゲームをやり続ける千歌音ちゃんは異常だよ！」

「姫子、私は何も…」

しかし、

「来栖川様の言う通りですわ。お嬢様！」

姫子に同行していた乙羽にもまでも言われてしまった。

「一、二回なら大目に見ましたけど、ずっとゲームにのめり込むお嬢様には私や皆はうんざり！ よってお嬢様を売ります！」

ああ…、姫子だけならともかく、乙羽にまで「売る！」と言われてはどうしようもない…。

おまけに二人は自分をどこかへ売る気満々だ（無論本気ではないが…）。

その後、姫子の怒りに怯えた千歌音はゲームをしなくなったらしい…。

「にしても、姫子は恐いわ…」

普段はかなり温厚な姫子であるが、本気で怒った姫子はかなり恐ろしい、と千歌音は悟ったとか…。

END



(後書き)

ゲームもほどほどに…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7957z/>

---

千歌音ちゃん、売ります！

2011年12月25日16時51分発行